

論文の和文要旨

論文題目：

現代ロシア語における性に関する一致をめぐって

氏名：

光井 明日香

ロシア語の名詞の性は一般的に男性、女性、中性の3つであるとされているが、多くの研究者によって、ロシア語における文法性の理解は上記のように単純ではないことが指摘されてきた。例えば、男性を指示する際には男性名詞としてのふるまいを、女性を指示する際には女性名詞としてのふるまいをするいわゆる総性名詞があげられる。さらに врач「医師」などの職業や社会的地位などを示す男性名詞は、女性を指示する際に定語や動詞述語が男性形で一致する統語的一致だけでなく、定語や動詞述語が女性形で一致する意味的一致も行う。本稿では、現代ロシア語の名詞の性に関して、特に人を表す名詞について筆者の行った計4回のアンケート調査の結果も含めながら記述的にまとめを行い、その複雑なふるまいについて理論的説明を試みた。

1.ではまず、本稿の議論において前提とした Crockett (1976)による人を表す有生名詞の分類を概観し、本研究の目的と、筆者の行った全4回のアンケート調査の概要とそれぞれの質問項目を紹介した。

続く2.では、現代ロシア語における一致と性について概観した。本稿では Crockett (1976)による分類に基づいて、主に人を表す有生名詞を有性別 (sex-differentiating) 名詞と無性別 (asexual) 名詞に分けて考察したが、ここでは有性別名詞と無性別名詞について主に先行研究をまとめ、問題点を洗い出した。

3.では Crockett (1976)の有生名詞の2つの分類のうち、無性別名詞について筆者の行ったアンケート調査の結果も含めながら記述的にまとめを行った。まず、文脈によって性の決まる無性別名詞について考察を行い、いわゆる総性名詞は1つのきれいなカテゴリーではなく、(1)のように男性名詞的なものから女性名詞的なものへとある種のグラデーションを描いている連続体的な性質を持つことを示した。

(1) 連続体としての総性名詞

総性名詞	
заводила など	пьяница など сирота、 пельма、 плагса、 лакомка など
男性名詞的 ←	→ 女性名詞的

さらに、総性名詞と судья 「裁判官」などの第2変化の男性名詞との境界はあいまいであるとして、総性名詞の連続体はあいまいな境界を挟んで(2)のように第2変化の男性名詞とつながっていることを示した。

(2) 第2変化の男性名詞と総性名詞の連続体

第2変化の 男性名詞	境界	総性名詞	
судья	староста глава	заводила など	пьяница など сирота、 пельма、 плагса、 лакомка など
男性名詞的	←	→	女性名詞的

さらに Crockett (1976)の挙げた文脈によって性の決まる無性別名詞のうち、総性名詞以外の врач 「医師」などの第1変化の男性名詞、судья 「裁判官」などの第2変化の男性名詞、конференцье 「司会者」などの不変化の男性名詞について見た。この中でも特に総性名詞と第1変化の男性名詞については多くの先行研究によって言及がなされており、Corbett (1991: 38-39, 183-184)は女性を指示する場合に一致にバリエントを持つ врач や директор など第1変化の男性名詞を指して hybrids といい、総性名詞とは区別している。本稿では、第1変化の男性名詞だけではなく、第2変化の男性名詞も hybrids に含むべきであるとして、これらの男性も女性も指示することができ、女性を指示する時に一致にバリエントを持つ名詞を混合名詞と呼び、不変化の男性名詞も混合名詞に属することを示した。そして、これらの混合名詞はそれぞれ異なるふるまいをすることで、主格以外の定語における一致、оба (обе)、два (две)との結合と один との結合という3点についてふるまいの違いをまとめた。そして、アンケート調査の結果から、混合名詞間の意味的一致の容認度の差が見られることから、混合名詞は1つのきれいに区切られたカテゴリーではなく、男性名詞的なもの

のから女性名詞的なものへとある種のグラデーションを描いている連続体的なカテゴリーであるということができ、(2)で示した総性名詞と第2変化の男性名詞との連続体と、第1変化の男性名詞を最も男性名詞的、総性名詞を最も女性名詞的とした連続体として繋がっていると考えることができる。つまり、文脈によって性の決まる無性別名詞は、男性名詞的なものから女性名詞的なものへと連続体的なカテゴリーを成していると結論付けることができた。さらに、第1変化の男性名詞の中でも語ごとに意味的一致のしやすさに違いが見られることから、第1変化の男性名詞もその中で連続体を成しており、文脈によって性の決まる無性別名詞は、以下の(3)のように、中に小さな連続体も含んだ男性名詞的なものから女性名詞的なものへと連続体的なカテゴリーを成していることを示した。

(3) 無性別名詞の男性名詞から女性名詞への連続体

無性別名詞				
混合名詞			境界	いわゆる総性名詞
第1変化の男性名詞	人を指示する 不変化の男性名詞	第2変化の 男性名詞		
男性名詞的 (хирург など) ↔ 女性名詞的 (бухгалтер など)	атташе など конфрансье	судья など	глава староста	男性名詞的 (заводила など) ↔ 女性名詞的 (лакомка など)
男性名詞的				女性名詞的

さらに 3.では文脈に影響を受けない、つまり意味的一致を行わない無性別名詞のふるまいについて考察を行った。意味的一致を行わない無性別名詞は、一致にバリエーションを持たないものの、男性も女性も指示できるという点では総性名詞や混合名詞と同じであると言え、そのため、文脈に影響を受けない無性別名詞のうち男性名詞と女性名詞は上記(3)の連続体の両端に位置すると考えられ、男性と女性の無性別名詞は(4)のように男性名詞的なものから女性名詞的なものへと連続体を成していると結論付けた。

(4) 連続体としての無性別名詞

無性別名詞							
男性名詞 ребенок など	混合名詞			境界	いわゆる総性名詞	女性名詞 персона など	
	第1変化の男性名詞	不変化の男性名詞	第2変化の男性名詞				
	男性名詞的 (хирург など)	女性名詞的 (бухгалтер など)	атташе など конференсье	судья など	глава староста	男性名詞的 (заводила など)	女性名詞的 (лакомка など)
男性名詞的	←					→	女性名詞的

続く 4.では、3.で記述的にまとめを行った混合名詞と総性名詞のふるまいについて、Pesetsky (2013)の女性化形態素 Ж を採用し、さらに文法素性の持ち方によって理論的説明を試みた。まず、本稿では性・数・格に加えて屈折タイプも一致に関わる素性として、以下のように素性を表示することとした。

(5) 一致に影響を与える素性とその表示

性：男性[+m, -f]、女性[-m, +f]、総性[+m, +f]

数：単数[+sg, -pl]、複数[-sg, +pl]、少数[+sg, +pl]

格：主格[NOM]、主格以外[OBL]、数量生格[OBL(GEN(Q))]

屈折タイプ：第1変化[I]、第2変化[II]、不変化[INDC]

混合名詞のふるまいの違いが引き起こされる要因については、Pesetsky (2013)の女性化形態素 Ж を利用することによって理論的な説明を試みた。混合名詞は、一般に男性名詞であるとされ、男性も女性も指示でき、女性を指示する際に一致にバリエーションを持つという共通点があるが、主格以外における定語との一致、два (две)、оба (обе)との結合、один との結合についてふるまいが異なる。このような混合名詞間のふるまいの違いを説明するために、本稿では Pesetsky (2013)の女性化形態素 Ж を利用し、さらに(6)に示すようにある一定の一致素性がコントローラーの名詞に揃うと Ж が非活性化され、意味的一致が阻害されることを示した。

(6) Ж が非活性化される条件

性[+m, -f]、屈折タイプ[I]、数[+sg]、格[OBL]

ただし、第1変化の男性名詞に関して、оба (обе)との結合において句全体の格が主格以外の場合においても意味的一致が可能であることは(6)の条件だけでは説明をすることができないため、以下の書き換え規則を提案した。

(7)

数量生格(GEN(Q))が語彙格に変わると、[+sg]の素性が[-sg]に書き換わる

次に総性名詞のふるまいの違いが引き起こされる要因についても理論的説明を試みた。まず、総性名詞は「意味的にのみ」一致を行っているわけではなく、統語的一致も行っている可能性を指摘し、その際に女性形が現れる条件を以下のように設定した。

(8) 統語的一致において女性形が現れる素性条件

[+f ∧ II]

また、総性名詞は指示対象の自然性によって意味が男性にも女性にもなるため、混合名詞のふるまいの考察において採用したゼロ形態素 \mathcal{X} だけではふるまいの説明ができないことから、新たに随意的ゼロ形態素 \mathcal{M} を提案した。そして、総性名詞のふるまいは特定の人物を指示する際には意味的一致を起こす随意的ゼロ形態素の \mathcal{M} あるいは \mathcal{X} が併合するが、併合する位置によっては統語的一致も生じ、その際に性素性[+m]をコピーすれば定語が男性形になり、そうではない場合には[+f ∧ II]の素性条件によって定語が女性形になることを示した。さらに、特定の人物を指示しない場合にはゼロ形態素は併合せず、総性名詞が持っている文法素性によって統語的一致が生じることも示した。

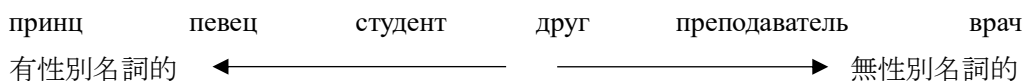
5.では人を表す有生名詞のうち、特に男性名詞・女性名詞のペアを成す名詞について、そのふるまいを記述的にまとめた。先行研究のうち、Bobaljik and Zocca (2011)について記述的に再検討を行った結果、はっきりと性の区別の出来る有性別名詞から無性別名詞の間には「中間段階」と呼べるようなものが存在し、何らかのグラデーションを描いている、連続体的なカテゴリーを成している可能性が見てとれた。そして、インフォーマントへの聞き取りやアンケート調査の結果、有性別名詞と無性別名詞には「中間段階」が存在する、つまり有性別名詞と無性別名詞はそれぞれが離散的なカテゴリーを成しているのではなく、(9)に示すように連続体的なカテゴリーを成している可能性がある」と結論付けた。

(9) ペアのある男性名詞のふるまい

	принц	певец	студент	друг	преподаватель	врач
複数形	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Она + 男性名詞	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
動詞述語	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
定語	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

以上より、男女ペアのある名詞のうち男性名詞は、(10)のように男性あるいは女性をもつばら表す有性別名詞から、文脈に影響を受ける無性別名詞への何らかの連続体を成している可能性を示した。

(10) 有性別名詞から無性別名詞までの連続体



さらに、無性別名詞の混合名詞のうち、第 1 変化の男性名詞と男女ペアのある名詞の男性名詞も、以下のように何らかの連続体を成している可能性があることも示した。

(11) 男女ペアのある名詞の男性名詞と混合名詞の連続体



また、2018 年のアンケート調査の結果から、男女ペアのある名詞の男性名詞と女性名詞の対応関係についても考察を行い、男女ペアのある名詞のうち無標の形の選択には語彙項目によって選択に差が生じ、女性を指示する際に преподаватель「講師」のように多くの人が無標である男性形を選ぶ場合もあれば、певец「歌手」のようにほとんど男性形を選択しない場合もあることがわかった。